

アジア・太平洋戦争時の庶民の意識

——戦中日記のテキストマイニング——

関西学院大学 渡邊勉

1. 目的

本報告の目的は、戦時期の日記を通じて、戦時期から戦後にかけての庶民の意識の変化を探ることである。終戦前後の日記は数多く残されており、作家や政治家など著名人の日記は、刊行されているものも多い。それらを分析した研究は、文学、政治学、歴史学などにおいておこなわれてきた。本報告では、計量テキストマイニングの手法を利用することで、戦時期から戦後にかけての庶民の関心や意識の変化の特徴を明らかにする。具体的には、山田風太郎の日記の分析から、戦中から戦後にかけての日記の特徴を分析することで、一般庶民の意識、関心の変化を明らかにする。

2. データ

主に山田風太郎の『戦中派虫けら日記』、『戦中派不戦日記』、『戦中派焼け跡日記』を利用する。1942年11月25日から1946年12月30日までの全1148日分の日記を対象とする。山田が20歳から24歳までの期間に対応する。文字数の最小値は10文字（46年11月4日）、最大値は11954文字である。また年別の一日平均文字数は、42年から967、716、641、823、516文字であった。全体的に減少傾向だが、45年のみ多くなっていることがわかる。

3. 分析

第一に、単純に使用された言葉の頻度について、時系列的な変化をみた。戦争末期に増加する言葉（アメリカ、戦争、日本人）、終戦後に増加する言葉（天皇、映画）、終戦後に減少する言葉（精神）など、いくつかの傾向が読み取れる。

第二に、対応分析によって、日記の時期と言葉を2次元上に付置し、時代と言葉の関連を示した。その結果、時代と言葉の間に特徴的な関連がみられた。第一次元は、個人的—全体的と解釈できる。一方には、会社、食べる、食堂、銭、金といった個人の生活を想起させる言葉が付置されており、戦争末期以前と近接している。逆の極には、天皇、日本人、国、政府といった社会全体を想起させる言葉が付置されており、終戦後の時期と関連している。第二次元は、非常時—平時と解釈できる。一方の極にはB29、警報、空襲、敵、火、煙といった言葉が付置され、もう一方には、天皇、円、映画、配給、小説、買うといった言葉が付置されている。戦争末期の一時期を除いては、後者の極に近いことから、庶民にとって非常時が終戦末期のみであることが伺える。

第三に、感情分析によって、感情表現のポジティブ—ネガティブの変化を分析した。その結果、44年後半から46年前半にかけて、ネガティブな言葉の頻度が高くなっていることがわかる。さらに、「日本」、「アメリカ」と共起する言葉に関して感情分析をおこなったところ、45年8月から10月の間にネガティブの程度が大きくなっていた。また「アメリカ」よりも「日本」のほうがネガティブ度が大きくなる傾向がみられた。

4. 結論

一方で、戦争末期までは、個人的な日常な内容であったものが、本土空襲とともに日記の内容が大きく変容し、そのまま終戦後は、日常生活とともに日本のこれからの関心が向くようになっていった。しかし他方では、44年から、ネガティブな感情が日記に多く表れるようになってきていた。

* 本研究は、JSPS 科研費 16K04042 の助成を受けたものです。